ラブ☆コメディー

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブ☆コメディー

【Ｎコード】
Ｎ２１４４Ｄ

【作者名】
ｐｅａｃｈ－ｐｉｔ

【あらすじ】
小村愛佳と田中優也は幼なじみ。愛佳は優也の事が好きだけど、優也はどう思っているのか確かめたくて告白！結果は・・・？

「行ってきまーすッ！」
私は元気よく家から出て行った。

私は小村愛佳。高校3年生。私は運動神経抜群とゆう訳でもないし、秀才というわけでもない。可愛くもない。けれど、私は小学校の頃から好きな人がいる。
それは・・・、
「ボーッとしてるとこけるぞッ！」
そう言って彼は私の腰を叩いた。
「いったーい！何すんのよ」
「ボーッとしてる奴が悪いんだよ」
・・・彼は田中優也。私と同い年。優也は運動神経抜群。かっこいいというのもあり、結構女子からはモテていた。
「ねー優也」
「ン？」
「テス勉してる？」
「してねーよ。そんなもん。めんどいしー」
「でも、成績低いと卒業出来ないよ」
「卒業なんて出来なくてもいーし」
「えー。一緒に卒業しよーよ」
ハッ
言ってしまった。
優也はなんて言うんだろ・・。
「は？なんでお前のために卒業しなきゃなんねーんだよ」
最低だ・・。
そんなこと言わなくてもいいじゃん・・・。
でも・・、明るくふるまわなくちゃ。

「そっか！そうだよね。生意気なこと言ってゴメンね・・」
私はがっかりした・・。
一緒に卒業したい・・。
そんな気持ちだけだったのに・・。
優也は私のことなんか・・
「別に。卒業してほしーならするけど？」
「へ？」
「どっちなんだよッ」
「あ・・。卒業して！一緒に！！！！」
「しゃーねーな。分かったよ」
もしかして・・、私が落ち込んだから元気付けてくれたのかな・・。
「じゃぁ約束！」
私は小指を突き出した右手を出した。
「なんでだよ。別に約束なんかしなくても俺は・・」
「卒業・・してくれないの・・？」
私は目を　うるうる　させて優也を見つめた。
「わ・・分かったよッ！すりゃーいいんだろ」
私の小指と優也の小指が絡まる。
私は　ドキドキ　していた。
「～♪ゆーびきーりげんまん。嘘ついたら針千本のーます。ゆーび切った！」
２人は小指を離した。
「絶対だよッ！嘘ついたら針千本飲んでもらうからね！」
「はいはい」
これで本当に一緒に卒業出来る♪
やった♪　。：＊
卒業まで３ヶ月・・。
その前にテストがある。
そのテストで卒業が決まる。
うちの学校はそうゆうしくみになっている。

教室に行くと、もうほとんどの人が来ていた。
優也は私と離れると一番仲のいい、‥哲‥ のとこに行った。
哲（橋本哲也）、優也とは小学校の頃から仲がいい。私も哲とは優也と一緒にいるということで結構仲がいい。
「おっす哲～」
「よう。優」
なぜか哲は優也のことを‥優‥ と呼ぶ。
優也が哲也のことを‥哲‥ と呼ぶからかな・・。
「哲！おはよッ」
私はわざと優也に近づきたくて哲に挨拶をした。
「よう。愛」
「私は‥愛佳‥ だよッ」
「めんどくせーんだよ」
そう。哲はめんどくさがりや。
だから、私のことも‥愛‥ と呼んでいる。
「そんなこたどーでもいいからさ！昨日の　アレ　見たか？」
「おー見た見た。チョー泣けたたしー」
「え？何々？何を見たの？？」
私も話しに入りたくて聞いてみた。
「ばーか。女は関係ねーんだよ」
優也は話に入れてくれない。
「えー！ケチ！！！！もしかして・・・ヲタク系・・？」
「ちゃうし！きもいしあんなもん」
哲・・見たんだ・・。
「じゃあ何？」
「男同士の秘密だ」
優也は　いい事言った！　って感じの顔をした。
「そうだな。秘密だな」
「もー。２人ともしーらないッ」

私は　フイッ　と向こうを向いてどっか行った。

～優也と哲ｓｉｄｅ～

「いーのか？優」
「え？」
「このままだと、愛に嫌われるぞ」
「・・・」
俺は黙り込んだ。
愛佳に嫌われるのはイヤだ・・。
でも・・
「謝ってこいよ」
「・・・サンキュ」
俺は愛佳を追いかけた。

～愛佳ｓｉｄｅ～

「あ。愛ちゃんおはよ」
声をかけてきたのは親友の：なっちゃん：だった。
なっちゃん（中原夏）、私とは小学校の頃からの仲良し。なっちゃんは哲と幼なじみ。なっちゃんは哲のことが好きなのだ。
「おはよ・・・。なっぢゃん・・」
私は涙が溢れてきて、泣いているせいで言葉が変になった。
「ど・・・どうしたの？！」
私はさっきのことを話した。
「・・・そっか。好きな人のことは知りたいよね」
「うん・・」
「私も哲ちゃんのこと知ってるつもりでも知らないことはあると思う。家は隣だけど、ちっちゃい頃からずーっと一緒だったけど知らないことだってきっとある。そんな時は知りたいと思うよ」
「私もなっちゃんと一緒だよ・・」
「でもね、愛ちゃん。優くんだって秘密にしたいことだって・・・、

知られて欲しくないことだってあると思うよ？だから許してあげなよ」
「うん・・。わがっだ・・。なっぢゃんあじがど・・・」
私はまた泣き出し、言葉が変になった。
「なっぢゃんはやざじいね」
「愛ちゃんのほうが優しいよ？特に優くんには・・・」
「やっぱり、がおやごどばにでぢゃうのがな・・」
「・・・愛ちゃん」
「ン？」
「泣きながら話すのやめて。なんか言葉が変でやだ」
「うん」
私は涙を手で拭った。
「あ」
「ン？」
「私！先生に用事あるんだった。ちょっと先生とこ行って来るね」
「ありがとー！なっちゃん！！」
私は大きな声で叫んだ。
「愛佳・・・」
すると背後から低い声がした。
私が振り向くと
・・・優也がいた。
「優也・・」
「あの・・さ」
私は黙って聞いた。
「さっきはゴメン・・。なんか‥ こうゆうこと‥ は愛佳に聞かれたくなくて・・」
「こうゆうこと？」
「俺達がさっき話してたアレってのはドラマだったんだ」
「へ？ドラ・・マ？」
ドラマって女子が見たりするやつだよね・・。優也がドラマ・・・。

「プッ」
想像したら笑いをこらえきれなかった。
「今笑っただろッ」
「笑ってないしー」
「絶対笑った！」
「・・・優也」
「ン？」
「私もゴメンね。言いたくないことを無理やり言わそうとして・・。私、さっきなっちゃんに言われて目が覚めたの・・。ホントゴメンね」
「ああ」
「愛ちゃーん！」
優也と話していると、向こうからなっちゃんが走ってきた。
「なっちゃん！」
「あ・・・お邪魔だった？」
「え・・・や・・邪魔じゃないよッ！ねー優也？」
「あ・・ああ！全然平気」
「そっか。よかった。アレ・・？愛ちゃん優くんと仲直りしたの？」
ちょっとなっちゃんの動きが演技っぽかった。
・・・気のせいだよね。
「うん♪なっちゃんのアドバイスのおかげ！ありがと」
「いえいえ」

やっと今日一日が終わった。
部活が終わりかえる途中、ある後輩女子2人が話していることを耳にした。
＜聞いた？聞いた？美奈子野球部の先輩に告ったんだってー＞
＜あー聞いたよッ結構かっこいいんでしょ？美奈子美人だから似合ってるよねー＞
＜でもふられちゃったんでしょ？＞

＜うそーッ！どうして？！＞
＜なんか好きな人がいるんだってさー＞
＜えー。美奈子以外にあの先輩に似合う人なんていないよー＞
＜だよねー。美奈子をふるなんて以外ー＞
＜で。その先輩の名前なんて言うの？＞
＜えっと・・・、田中優也っていうんだって＞
田中優也・・・。優也だ。告られたんだ・・。
好きな人・・？誰？？すっごい気になるんですけどー！・・・告ってみよっかな・・。私も・・。でも・・勇気ないしな・・。
今日なっちゃんに相談してみよッ！
私は家に着くとなっちゃんにメールした。
『今暇？』
すぐ返事がきた。
『ＯＫだよー。どうしたの？』
『ちょっと聞きたいことがあって・・・』
『いいよ。それじゃあ公園で待ってるね☆★』
私は家を飛び出した。
公園に着いたが、公園内にはなっちゃんの姿はなかった。
・・・まだ来てないんだろう。
私はベンチに座った。
「愛ちゃーん！」
見ると、なっちゃんと哲が走ってきた。
「なっちゃんどうして哲が・・」
「今デー・・・じゃなくて途中でばったり会っちゃって。エヘヘ・・・」
「そうなんだ」
その後なっちゃんに聞いたところ、
哲とばったり会い、なっちゃんはデートのつもりで一緒にいたらしい。
「・・・で？聞きたい事って何？？」

「・・・私、優也に告りたいって思ってるんだ」
「「え?!」」
2人は一緒に声がそろい、驚いていた。
「それで・・どうしたらいいと思う?」
「うーん・・・。告ったことないから分からないけど、まず手順を決めよっか」
「うん!」
「俺も話入る!じゃあ、学校で告る?優の家で告る?」
「大胆って言ったらいえだよねぇ」
なっちゃんは　ニヤリ　と笑いながら言った。
「じゃ・・じゃあ家にしよっかな」
「「おー」」
2人は本当に息が合っている。
「まず、俺が優ん家に居るからOKって思ったらメールするよ」
「ありがとう!」
「そんで哲ちゃんは、愛ちゃんにメールした後すぐ帰ってね?」
「えー。なんでだよーッ」
「なんでって!バカ!!哲ちゃんがいたら愛ちゃん告れないでしょ!!」
「ホントだ」
「もー。哲ちゃんボケないでよ」
2人は笑いながら計画をたててくれた。
そして数分後、
「よしっ!この作戦で行こーッ!!!!!!」
「頑張れッ愛ちゃん!」
「ありがとう2人とも」
ふたりは　ブイッ　とピースした。

・・・次の日。
とうとうこの日がやってきた。

なっちゃんと哲が考えてくれたんだもんッ！
成功させなきゃ！！

～優と哲ｓｉｄｅ～

ピ～ンポ～ン
誰か来た。
俺はドアを開ける。
「はい？」
「よっ」
ドアの向こうには哲がいた。
「どした？」
「今から遊ばね？」
「いいぜー」
俺は暇だったので遊ぶことにした。
なぜか哲は強引におれの部屋に入ってきた。
そして数時間後、
哲は携帯をいじり出した。
たぶんメールをしているのだろう。
哲はメールが終わったのか、携帯を閉じた。
「あ！俺用事忘れてた・・・」
「はぁ？！アホだなお前・・・」
「ハハハ。ンじゃあまたな」
「おう」
哲は家を出て行った。
そして数分後、
ピ～ンポ～ン
またチャイムが鳴った。
家には誰もいないので俺が出なければならない。
ガチャッ
俺はドアを開けた。

「はい？」
ドアの向こうには愛佳が立っていた。

～愛佳ｓｉｄｅ～

私は着替えた。
チャララ～ン
携帯の着信音が鳴った。
・・・哲からだ。
ついに来た！
『今ぐらいＯＫだぜッ！愛、絶対両思いになれるぞ！！』
絶対なれる？あー。勇気づけるためにわざと言ったんだ。
「よしっ！行くぞ！！」
私は家を飛び出し、優也の家の前に立ちインターホンを押した。
ピ～ンポ～ン
ガチャ
「はい？」
優也が出てきた。
「や・・・やっほ」
私は動揺しながら言う。
「どうした？」
「あ・・・遊ばない？？」
「いいぜ」
「家・・・入ってもいい？」
「おー」
私は家に入った。
「おじゃまし ま～す・・」
「誰もいねーぞ」
「え？！」
「おかんは買物だし、妹は遊びに行ったし、姉貴はデート」

じゃ・・じゃぁ二人っきり?!
うわぁ・・・むっちゃ緊張してきたぁ。
優也は部屋に案内してくれた。
テレビ、ソファー、ベッド、小さな透明なテーブル・・・。なんか女の子みたいな部屋だ。
「適当に座ってて。飲み物とか持ってくるから」
優也は少し照れくさそうに言った。
「わ・・・分かった」
バタンッ
優也は部屋を出た。
・・・この部屋優也の匂いがする。
こんなとこで寝てるんだ・・・。
今度、私も優也部屋に入れよ。
なんとなくこんなこと考えてほしいな。
・・・なんてね。
ガチャッ
「こんなもんでいいか?」
優也が皿いっぱいにお菓子を入れて部屋に入ってきた。
「多ッ!そんなに食べられないよぉ」
「マジ?!まぁいいや。俺が食べるし♪」
子供みたいな笑顔。
こんな顔するんだぁ。
「優也の笑顔って子供みたいだね」
「よく言われる。ってか、長く一緒にいたのに気づかなかったのかよッ」
「だって優也私に向かってそんなに笑わないもん」
「そうか?」
「そうだよ」
こんなことを話していると時間が過ぎていく。
だめだ!言わなきゃ!!

ピロピロリ～ン
携帯の着信が鳴った。
「ちょっといい？」
「おー」
私は携帯を開いて見る。
・・・なっちゃんだ。
『早く告らないと時間なくなっちゃうよッ！頑張ってー！！！！』
なっちゃん・・・、どっかで見てるんだ。
よしっ！
「ゆ・・・優也！」
「ン？」
「あのさ・・・。今日聞いたんだけど・・・告られたってホント？」
「あー。後輩に」
「断ったの？」
「ああ。後輩に興味ないし。それに・・・」
「それに？」
「俺・・・好きな奴いるし」
本当だったんだ・・・。本当にいるんだ。
「その好きな人って・・・誰？」
「・・・お前はいないのかよ。好きな奴」
「え・・・」
こんなこと聞かれるなんて思わなかった。
自分が言うのは恥ずかしいから私にふってきたのだろう。
「わ・・・私もいるよ」
「・・・誰だよ？」
言っちゃおっかな・・・。ここはいじわるして・・・。
「優也が言ってくれたら言う！」
「じゃあ俺も愛佳が言うまで言わない」
「えー。ずるいッ」
「ずるくねーし」

私が言えば言ってくれんだよね？
それじゃあ・・・
「・・・優也だよ」
「え？」
「私の好きな人は優也だよッ！！！」
「え？！」
優也はすごく驚いていた。
・・・そりゃ驚くよね。
急にこんなこと言われたら誰だって驚くに決まってる。
「言ったよッ！優也の好きな人は誰？」
「・・・愛佳」
へ？今・・・愛佳 って言わなかった？
「え？」
「愛佳だ」
わ・・・私？！
ってことは・・・
「私達両思い？！」
「そうらしいな」
私は心から喜んだ。
・・・嬉しい♪ ＊
少女マンガはよく幼なじみがカップルになることが多いけど、本当になるなんて夢みたいッ

～17：00～
「あ。もう帰らなきゃ」
「マジ？うわぁもうこんな時間」
優也は玄関まで来てくれた。
「今日はありがとう」
「ああ。またいつでも来いよ」
「うん」

「じゃね」
私は軽く手を振りながらドアを閉めた。
かすかに見えた。
・・・優也が手を振ってくれているのを・・・。

家の近くまで来ると、誰かが家の前で立っていた。
・・・なっちゃんと哲だ。
「あ。愛ちゃん」
「愛。どうだった？」
「・・・成功・・・しちゃった」
「ホント？！おめでとーッ！！！」
「やったな」
「うん！2人どもあじがど・・・」
「あーあ。愛ちゃんたらまた言葉が・・・」
私は手で涙を拭う。
「それじゃあ、用事あるから！」
「俺も」
「そっか！マジでありがと」
私は家に入り、自分の部屋のベッドに飛び乗った。
・・・はぁ。幸せだ～♪

それから1ヶ月後、
明日はテスト。
卒業出来るか出来ないかは明日で決まる。
学校の帰り、いつもどうり優也と手をつないで帰った。
「ねー優也。明日テストだよ？大丈夫ー？？」
「テストなんてどーでもいいし」
「あー！嘘つくつもり？一緒に卒業してくれないと針千本だよッ」
「ゲッ。忘れてた」
「私と一緒に卒業するか、針千本飲むかどっちがいい？？」

私がそう言うと、優也が私の手を引っ張った。
「もちろん！愛佳と卒業することだ♪」
優也は私のほっぺで自分のほっぺを　スリスリ　させながら言う。
私は次第に顔を赤らめる。
「じゃ・・・じゃあね！」
「おー」
「テス勉ちゃんとしてよ？」
「分かってるって」
私は家に入り、机に直行した。
・・・勉強しなきゃ！優也と一緒に卒業するんだもん♪

次の日、
今日はテスト日。
・・・テストは思っていた以上に難しかった。
やばい・・・。私も卒業ギリギリだ・・・。

帰り、
「優也ー。テストどーだったぁー？？」
私はヘトヘト気味に聞く。
「ン？簡単だったぜ？」
「え？！」
テス勉を全然していない優也が毎日勉強している（つもり）私よりもそんなこと言えるなんて・・・。実は優也って秀才だったりして・・・。

家に帰り、昨日寝ていないせいかすぐ眠りについた.

数日後、
テストが返ってきた。
なんとか全教科平均点以上だった。

優也に聞いたところ、優也もギリギリ平均点以上。
これで卒業出来る♪

今日は卒業式、
私はいつも以上におしゃれをした。
理由は卒業式だから、もう一つは
・・・優也にみてほしいから。
卒業式が始まった。
生徒全員が卒業証彰を受け取り、卒業式は終わった。
私は優也のもとへ走った。
「優也ー！」
「愛佳」
「卒業できたね」
「約束守ったろ？」
「うん♪」
「ご褒美にキスして？」
「何のご褒美？」

「卒業できた褒美」
「そんなの当たり前のことだよッ」
「・・・愛佳のこと嫌いになった」
「え?!」
「もう終わりだ」
「や・・・やだッ!」
「じゃあ褒美♪」
「う・・・」
チュッ
私は恥ずかしながらも優也の唇に軽くキスをした。
「ありがと♪愛佳のこと前よりも好きになった!!」
「やったぁ」

私達はこれからもずーっとラブラブ♪
ラブ☆コメディー!!!!!!!!!!

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2144d/

ラブ☆コメディー

2011年1月26日11時13分発行